

# 「庄内さくら学園独自カリキュラムの取組み」

～ キャリア教育「キッチンカープロジェクト」を通して社会を学ぶ ～

豊中市立庄内さくら学園

## 【本校の児童生徒の現状と課題】

本校は、3つの小学校と2つの中学校を統合し、令和5年度（2023年度）に開校した、豊中市初の施設一体型義務教育学校である。令和8年（2026年）1月現在の児童生徒数は1,152名で、開校以来、毎年増加傾向である。豊中市南部の庄内に位置し、校区内の阪急庄内駅周辺には商店街や市場があり、その外側には住宅地が広がっている。

学校は旧庄内小学校と第六中学校跡地を活用して建てられ、同一敷地内に出張所や図書館、公民館などを備える「庄内コラボセンター」が併設されている。両施設



の外観は統一され、2階の渡り廊下でつながっている。両施設の間は、「あいさつロード」と呼ばれ、市民からも親しまれている。

新施設の整備に伴い地域が活性化し、住宅の建て替えや新たな住居の増加も進んでいる。

本校の教育目標は「自ら考え、行動し、仲間とともに豊かな社会をつくる子どもを育てる」である。100名を超える教職員が、自己肯定感や挑戦意欲の向上、学習習慣の定着を図る取組みを進めている。小中一貫教育の効果を高めるために4-3-2の3ステージ制を導入し、5年生から50分授業・標準服・定期テストを取り入れて後期課程へのスムーズな接続を図っている。

総合的な学習の時間では、独自カリキュラム「SDG（庄内・だいすき・げんき）プログラム」を展開し、大学や専門家と連携してコミュニケーション、キャリア教育、地域学習を進めている。大阪音楽大学の教授や学生によるミュージカル指導や映像制作の授業、劇作家や劇団員による演劇ワークショップ等を通して、多様な学びを推進している。後ほど紹介する「キッチンカープロジェクト」もそのプログラムの一つで、開校当初から続く本校の特色ある活動である。



## 【めざす子ども像】

- ・社会のルールや規律を大切にし、誰もが安心できるつながりを大切にする子ども
- ・自分の良さに気づくとともに、互いを認め合い行動できる豊かな人権感覚をもった子ども
- ・自ら進んで学び、主体的に考え、判断し、自分を表現できる子ども
- ・様々な人との出会いを大切にして多様な生き方を学び、自らの生き方を見つめる子ども
- ・規則正しい生活習慣を身につけ、社会生活に必要な健康やかな体をつくろうとする子ども
- ・自らの将来に希望をもって自らの生き方・働き方（キャリア）をつくろうとする子ども

## 【SDGプログラムで本校の子どもたちにつけたい力】

本校では、前述のとおり、教科教育とともに“SDGプログラム”と名付けた独自カリキュラムを9年間にわたり系統的に企画・実施している。

開校前から校区の子どもたちの課題や生活実態をふまえ、子どもたちが主体的に自らの生き方や働き方を創るための力を育む方策について検討を重ねてきた。

そして、ねらいや子どもたちにつけたい力を以下の3つの領域に整理し、軸となるプログラムを中心に実践を展開している。

	ねらい・つけたい力
自分と他者	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自己表現力、コミュニケーション力、対話力、自他の違いを認め合う力といった自分を豊かに育てる力</li> <li>●他者との違いを肯定的に受け止め、対等で公正な態度や行動力につながる人権感覚</li> </ul>
地域	<ul style="list-style-type: none"> <li>●安心で安全な居場所、仲間や他者（地域を含めた多様な大人を含む）との温かい人間関係</li> <li>●上記の環境や関係の中で育まれる自己肯定感</li> <li>●地域や社会への信頼や期待、そして希望</li> </ul>
キャリア・生き方	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自分を見つめ、様々な生き方のモデルに出会うことで育まれる将来展望やそこに向かうために必要な確かな学力と探究スキル</li> <li>●自らの働き方や生き方を考えるための様々な経験を保障するキャリア学習</li> </ul>

「自分と他者」の学習では、第1ステージ（1～4年生）は音楽表現やきもちワークショップ、第2ステージ以降（5～9年生）は、哲学対話や演劇ワークショップ

などに取り組む。音楽表現から徐々に対話や抽象的な議論、そして論理的思考へと深めていく。他者との関係の中で自分を表現することの心地よさや互いの良さを認め合い、協働することの喜びを実感することで自己肯定感を高め、他者と協働する力をつけることをねらいとしている。

「地域」学習では、主に社会科の地域学習に重ねた取り組みと地域の人々との出会いや交流の場を創っている。低学年での校区たんけんやまちたんけん、3年生の公共施設やまちを支える警察署や消防署の見学、4年生で学ぶ環境問題や地域防災の取り組みへとつなげている。地域社会で自分たちの暮らしを守る人々との出会いから、そうした人々への感謝とこれからのまちづくりに必要な仕事についても学ぶ機会となり、これらの学びが「キャリア・生き方」の学習ともつながっている。

「キャリア・生き方」の学習では、地域学習と重ねつつ、地域の資源や人材を最大限に活用し、個々の子どもたちのキャリア形成に向け、「家族や育児」や「仕事や働くこと」についての学びの機会を設定している。低学年では、子育て支援センター「ほっぺ」や保健センターから子育てや保育について聴き取り学習を実施し、7年生の保育体験学習での実践につなげ、地域の縦のネットワーク（多世代の交流）について学ぶ機会にしている。また、低学年での「まちたんけん」での地域の方との出会い、5年生での地域CMづくりや地域の企業の方からプロの仕事を学ぶ学習、6年生での地域の起業家からの聴き取り学習とキッチンカープロジェクトの学習が、8年生の職場体験学習へとつながるようにしている。

#### 【キャリア教育の取り組みにおける教職員の思い】

私たちがめざすキャリア教育は、子どもたち一人ひとりが自己実現へと向かう道筋を見つけられるよう支援することである。子どもたちが自らを見つめ、学び、他者とつながりながら、自分らしい生き方・働き方を創り出そうとする意欲や態度を育むことが重要だと考えている。そのうえで、自分自身の良さをどのように生かして社会に関わり、参画していくのかを考える力を育てたい。

こうした意欲を育むためには、多様な「出会い」と「経験」を重ねる中で、子どもたちが自分の中にある様々な可能性に気付く機会を設定することが不可欠である。その機会の積み重ねによって、自分に自信をもち、新しい世界に挑戦しようとする姿勢が育まれていく。私たちは、そのような学びの場を継続的に創り出していき

たいと考えている。

#### 【6年生「キッチンカープロジェクト」取り組み概要】

6年生は、社会に関わる貴重な経験となる8年生の職場体験学習の準備として、仲間とともに社会のニーズを探り、自分たちが社会に対してできることは何か、どんなニーズをとらえ、学んできた知恵や知識をどのように活用するのかに向けた「キッチンカープロジェクト」に挑戦した。

#### ◎ねらい

- ・地域で働く人々との出会いを通して、仕事の苦勞ややりがい、働くことの楽しさを聴き取る。
- ・庄内で働いてきたことや、まちに対する愛着や願いを聴き取る。
- ・社会の中で「働くこと」「大人になって生きていくこと」について考え、自分自身がこれからすべきことについて考える。

#### ◎第1部 職業講話「社会で働くプロの話を聴こう」



6月に地域で起業している8名の方を講師として招き、起業に至った経緯や地域への思いについて聴き取り学習を行った。

各クラスの子どもたちが4グループに分かれ、それぞれの講師から聴き取りしたことを他のグループとも共有した。工務店、製造業、フットケアサロン、助産院、スポーツ教室など、多様な職種の方々による講話を通して、働くことの意義等について理解を深める機会となった。

子どもたちは、実際にかんながけを体験したり、新生児の人形を抱かせてもらったりと、普段はできない体験ができた。また、多様な職種の方々による講話を聴いたり、「もともと異なる夢を持ちながらも、さまざまな機会や出会いを通して『後悔したくない』『自分らしい働き方をしたい』という思いから起業にふみ切った」という講師の話を聴いたりすることで、子どもたちも“働くこと”や“生き方”について真剣に考えている様子だった。

#### ◎第2部「キッチンカープロジェクト」

##### ①キッチンカー事業者との出会い（7月）

各クラスに1台ずつ協力いただくキッチンカーの事業者を決定した。当日は、事業者の方から商売の仕組みやキッチンカーの特徴について説明を受け、助言をふ

まえて実際に販売するメニューの検討・考案を進めた。販売日に向けて、クラスと事業者の方が連携して取り組むことを改めて共有する機会となった。



この出会いを通して、どのクラスの子どもたちも自分たちの担当のキッチンカー事業者の方の人柄や仕事への思いに触れ、関わるほどに事業者の方のことが大好きになっていった。そして、「自分たちの考えたメニューを本当にお客さんに届けたい」「売りに貢献したい」という意欲と、販売日に向けた緊張感やわくわくが一段と高まっていく姿が見られた。

### ②メニューの考案（夏休み前）



事業者の方から料理の得意分野や経験を教えていただき、それを参考にしながら、子どもたちは班ごとにオリジナルメニューを考えていった。材料や作り方はインターネットで調べるだけでなく、栄養教諭や家庭科専科の先生に質問したり、家族に相談したりと、多様な方法で情報を集めていた。それらを班に持ち寄り、意見を出し合う姿があちこちで見られた。

中には夏休み中に自宅で作成を行い、改良点を話し合う班もあった。盛り付けやネーミングにもこだわり、自分たちや学校の特徴をどう表現するかを、料理を通して真剣に考える子どもたちの姿が印象的だった。

話し合いを重ねる中で、普段はあまり発言しない子どもたちが自分の意見を積極的に伝えられるようになったり、学習に前向きになりにくい子どもたちが意欲的に取り組んだりする姿も見られた。

話し合いを重ねる中で、普段はあまり発言しない子どもたちが自分の意見を積極的に伝えられるようになったり、学習に前向きになりにくい子どもたちが意欲的に取り組んだりする姿も見られた。

### ③考案したメニューをプレゼン（9月）

各クラスのキッチンカー事業者の方に向けて、班ごとに考案したメニューのプレゼンを行った。子どもたちは、推しポイントや特徴を分かりやすく伝え、採用してもらえるよう一生懸命に発表していた。

ふり返しシートには、「すごく緊張した」「もっと上手にできたと思う」などの反省がある一方で、「友だちとの関わり方が変わった」というアンケート項目では、「すごくそう思う」「そう思う」という回答が多く、「班で協力して考えられた」とふり返る子どもたちもいた。

これまでの準備を通して、協力の大切さを実感した様子がよく伝わってきた。



班で話し合いを重ね、資料づくりや練習

に取り組む過程は、子どもたち自身が関わり方を見直すきっかけとなったようだ。メニューづくりだけでなく、人間関係の成長にもつながったことが印象的だった。

### ④チラシ作成とチラシ講座

#### ～グラフィックデザイナーとの出会い～（10月）

販売宣伝用チラシについて学ぶため、地域で活躍するグラフィックデザイナーの方を講師にお招きし、内容を効果的に伝えるためのチラシの作り方を教えて



ていただいた。普段は何気なく目にしているチラシにも多くの工夫があることを知り、子どもたちは初めて触れる知識にわくわくしていた。また、事前に自分たちで作成したチラシについても助言をいただき、そのアドバイスをもとに改善作業に取り組んだ。

### ⑤試食～メニュー決定～（11月）



自分たちが考えたメニューを事業者の方々が実際に作ってください、子どもたちは試食をさせてもらった。食べてみる

中で「ベーコンを1枚減らしたい」「値段をもう少し下げられないか」「チョコソースはあった方がいい」「ケチャップも追加したい」など意見が出て、班ごとに話し合った内容をその場で事業者の方に相談し、最終的なメニューを決定した。また、販売日当日の役割分担についても話し合い、1か月後の本番に向けて最終的な調整を行った。

### ⑥宣伝広報活動～チラシ配布～（12月）

自分たちで作成したチラシを、どこで配るのが効果的かを話し合い、駅前や商店街、スーパー、市場の前などに分かれて宣伝活動を行った。初めは声をかけられなかったり、受け取ってもらえなかったりと苦戦していたが、次第にコツをつかみ、道行く人に積極的に声



をかける姿が見られた。1人では恥ずかしかった子どもたちも、友だちの力を借りて配ることができた。

活動後のふり返りでは、友だちの頑張りや優しさに気付いたことに加え、「庄内のまち」のあたたかさを感じたという声も多く見られた。

### ⑦販売活動 (12月)

待ちに待った販売活動当日。子どもたちは初めてのお金の受け渡しや接客、キッチンでの作業、商品の受け渡しなど、これまで準備してきた活動に次々と挑戦した。最初は宣伝活動のときと同じように緊張した様子



も見られたが、役割に慣れるにつれて表情も柔らかくなり、楽しさを感じながら働く姿が見られるようになった。

ふり返りには、「初めは緊張してうまくできなかったけれど、お客さんが優しく聞いてくれたので落ち着いてできるようになった」のような感想が多かった。長時間働く大変さを感じながらも、同時にやりがいや達成感を感じられたことがうかがえる。

また、お客様アンケートから、「手書きのメッセージにあたたかい気持ちになりました」「寒い中、大きな声で呼び込みをされていて素敵でした」「商品を渡すときに元気な声と笑顔で対応してくれてよかったです」「寒い中がんばっていてえらいなと思いました。私も仕事をがんばろうと思いました」など、子どもたちへの励ましの言葉がたくさん届いた。こうした声に触れ、子どもたちは自分たちの取組みが誰かの気持ちを動かすことを実感し、達成感や自己肯定感をさらに深めることができた。

販売活動は単に商品のやりとりをするだけでなく、人と関わりながら働くことの難しさや楽しさを学ぶ貴重な機会となった。子どもたちにとって、この日の経験は“働く”ということの意味を実感する重要な学びにつながる機会となった。

### ⑧ふり返り (12月)

キッチンカー事業者の一人は、「メニューを実現させるために何度ダメ出しされても、相手のニーズに合わせて改良を重ねる姿勢が嬉しかった」と話してくださいました。子どもたちの粘り強い取組みが、事業者の方にも伝わっていたようだ。また、子どもたちにとっては、地域の人から、チラシ配りの時に「がんばってるね」や販売当日に「おいしかった」と声をかけてもらえたことが、何よりの報酬となった。自分たちの活動が地域に喜ばれる経験は、大きな励みとなった。

これらの取組みを通して、子どもたちは自分の良さをどう生かし、社会にどのように関わり、参画していくのかを考える機会を得た。多様な「出会い」と貴重な「経験」の中で、自分の可能性に気付くことができたのではないかと感じている。

#### 【成果と課題】

子どもたちのふり返りには、「コミュニケーションがうまく取れるようになった」「友だちの良いところを見つけれられた」「人との関わり方が変わった」など、自分や仲間の変化に気付く感想が多く見られた。また、「忙しそうなお客が多かったけれど、冷たく言う人はおらず心が温かくなった」「がんばってねと言われて嬉しかった」「人の優しさに支えられていると感じ、感動した」など、庄内で過ごす人たちの温かさについても書かれていた。

自分たちで一からメニューを考え、宣伝し、販売した達成感に加え、まちや仲間、そして自分自身を大切に思う気持ちを育むことができた活動だったといえる。

本取組みは開校初年度から続き、今年で3年目を迎えた。これまでの積み重ねにより、保護者や地域にも少しずつ定着してきている。今年度は地域の協力を得て、“オリジナルメニューに自家製野菜を使おう”という新たなチャレンジにも取り組んだ。夏休みにはキッチンカー事業者の方と打ち合わせを行い、ジャガイモ、ほうれん草、小カブ、ラディッシュを育てた。畝づくりから収穫まで、地域の方々が6年生を丁寧に支えてくださった。また、地域の畑で育ったサツマイモやしいたけ、お米も使わせていただき、「自分たちが育てた野菜を使っています！」と自信をもってアピールすることができた。



このように地域の支えもいただきながら、子どもたちが主体的に自らの生き方や働き方を創るための力を育む取組みを、今後もさらに充実させていきたい。